
頑張れ ホワイトデー！

こつぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

頑張れ ホワイトデー！

【Nコード】

N7514L

【作者名】

こつぶ

【あらすじ】

3月14日はホワイトデー。江戸川コナンにとっては、苦難の日…。始まりは、彼の前に突き出された、一枚の紙きれだった。少年探偵団中学生な話です。Candlelight閉鎖に伴い移行小説。中学生コ哀です。

3月14日はWhite day.

バレンタインのお返しと、女の子にいつもありがとこの気持ちを込めて、男の子が贈り物をする日。男の子にとっても、女の子にとってもこのイベントが大切な記念日になったりする。

けれど、希に喜びきれない男が此処にいたりして。

+++

「なあ、灰原。…なんで今年に限って、貰ったチョコレートのプレゼント返しなんてしなきゃなんねーんだ？」

生徒会室前の廊下で、彼、江戸川コナンは算を手に、半ば不貞腐れ気味にその言葉を吐き出した。

先ほど大勢の女の子たちから、力強く太い筆文字で「誓約書^{せいやくしょ}」と書かれた白い封筒を渡され、それからずっと彼はこんな調子。

「あら、意外とケチなのね。毎月、世界を股にかける大人気の天才推理作家さんから使い切れないほどたくさんのお金を貰ってるんでしょ」

くすりと口許に笑みを浮かべ、彼をゆっくりと見上げると、私はアルミ製のバケツの中に床雑巾を軽く放り込んだ。そんな私に彼は呆れたような表情を浮かべ、わざとらしく溜め息を吐いてみせる。

「バー口。そういうことを言ってるんじゃないかな。俺が言いたいのはだ、先月、あんなにもらったチョコレートもまだ食べきれてねえのに、どこのどこいつかもわからない相手を探すためにまたいろいろ考えなくちゃなんねえじゃねえか、ってこと」

「…そんなの貴方が毎日飽きずにやってることと少しも変わらないじゃない」

「そりゃそうだけど・・・」

恨めしそうに私を睨む彼に一笑して見せると、私は既に塵や埃や泥のせいで濁ったバケツの中の水を取り替えるためにバケツを持って、一人手洗い場に向かい歩き出した。

手洗い場に着くと、すぐに汚れた水を捨てる。

新鮮な水に入れ替えようと、水道の蛇口を捻り、水がジャージャーと空のバケツを満たしていくのをぼんやり眺めながら、私は思わず苦笑して呟いた。

「まあ、あの人の言いたいこともわかるけど・・・」

彼女たちが一体何をしたいのかはわからない。

バレンタインのとき、彼の机に、下駄箱に、ロッカールームに…または廊下を歩けば彼をぐるりと取り囲み、その状態でわき目もふらず綺麗にラッピングされた包みを手渡ししていた。まるで芸能人を空港で見たときみたいに彼を取り囲み、きゃあきゃあ黄色い声を出して。

あれは全てプレゼントのお返しが目적だったというのだろうか。

——まさか。

私は思わず失笑した。

「…ああ、きつとそれ、 A組の九十九さんのグループでしょ」

放課後、帰る準備をしながら何気なく呟いた私の疑問に、吉田さんは視線を未だ鞆に向けながら、さらりと言つてのけた。

つくもあやの
九十九文乃。 何度も何度も耳にしている名前だ。

小学1年のころから「江戸川コナン」に好意を持っていたらしく、1度とある事件に関わったときから彼女の気持ちはボツと燃え上がり、早7年。

移行、毎回各イベントごとに猛烈アタックをしかけるといふ噂の彼女。

彼と、女の子の中で誰よりも仲がいい私たち2人にことあるごとにつつかかってくる少し気の強い女の子。だから彼女の名前を聞いて、ああ、またあの子か、と思わず苦笑してしまった。

「で？今度は何をしながらっているのかしらね」

「…評価、じゃない？」

「…評価？」

思わず眉を顰めると、幾分大人びた表情で私を見る彼女を思わず見返した。

「そう、評価」

もう一度同じ言葉を繰り返す友達の言葉の意味を、私は未だ理解

できずにいた。

何に對して？

勉強で親や学校に評価され、それ相当の目で見られ、その評価が高ければそれなりにもて囃され、低ければもつと勉強しろ、おまえはそれだから…。と見られるこのご時世。

お返し一個で一体誰が何を評価しようというのだろう。

恋愛ぐらい自由に生きたい、って思わないのかしら。

「自分では世界でたった一つのチョコをあげたとしても、コナンくんにとっては沢山のチョコの中の一つでしか過ぎない。…そう感じるのが不安なの、だから確かめたいんだよ。

『お返し』って形で。自分がどれだけ彼に思われてるか、って…。自分に対するコナンくんの評価が知りたいんだろ？ね」

「…知ってどうするの？もし、評価が思ってた以上に低かったら？」

また、落ち込んだり、辛い想いをするのよ？

彼女たちの気持ちがわからないわ、と私は肩を竦めると、吉田さんはただ可笑しそうにくすくすと笑った。そんな彼女に對して、何？と思わず私が怪訝な顔を見ると、彼女は何でもない、と言うように笑いながら胸の前で両手を振ってみせた。

「ううん、相変わらずだなあって思つて。…でも私も哀ちゃんと同じ意見だなあ。人の気持ちなんて、知らないままの方がいいことだつてあるかもしれない」

その言葉を呟いた後で少し寂しそうに笑う彼女の横顔を見て、私もまた少し不器用に微笑んだ。

いつのまにか教室内には私と吉田さん二人だけ。
こんな話をするには一番いい環境ではあるけれど。

「でも評価を知ったその上で、好きな人のためにもっともつと頑張ろう、絶対振り向かせてやろうって気持ちになることもあるんじゃないかなあ。…恋する女の子ってそういうところが強いから」

九十九さんなら尚更ね、と吉田さんはまた小さく笑った。
ふられても、ふられてもあきらめない。

そんな彼女の姿を想像し、私はそのとき初めて彼女を好ましく思った。

私にはそんな情熱はないから。
好きな人のために一生懸命になれる彼女が少し、うらやましい。

「…吉田さんは参加するの？」
「まさか。だって私は…」

そこまで言つて、吉田さんは軽く首を振り、今度はちゃんと口に出して、「なんでもない」と明るく笑った。

「帰ろっか。…もうコナンくんたち、下駄箱で待ってるかもしれないよ」

「そうね、少し遅くなったかもしれないわね。でもいいんじゃない？いつも待たされるのはこっちなんだし」

「そうだね、少しぐらいはね」

私たちは顔を見合わせてころろと笑った。

教室を出るときに見た、窓を照らす夕陽が少し、眩しかった。

+++

3月14日。

朝、私がいつもと同じように探偵事務所の彼の家に迎えに行くと、まず出迎えてくれたのは蘭さんだった。

「ごめんね、哀ちゃん。ちょっと待っててね、まだコナンくん用意できてないのよ。さっきまでまだパジャマだったんだから。レディーを待たせるなんて、ホント信じられないわよね」

ホント誰に似たのかしら、そうばやいたあとで、彼女は優しく笑った。

その花のように明るい笑顔につられ、私も思わず微笑んでしまう。今の彼女は、電車で40分かかる会社に出勤するためにスーツも着込み、OLらしいメイクを施し、後は家を出るだけ、という状況だったようだ。

スーツを着込んだ彼女は大人っぽく、とても綺麗だった。

私一人を残して死んだ姉と、内側だけではなく、外見も似てきて、少し切なくなる。

蘭さんは姉と同じ表情を私に向けて、そういえば・・・と顎に指を2、3本あて、呟いた。

「今日、ホワイトデーだったんだよね。お返し見てびっくりしちゃった。コナンくんってモテるんだね。ホント、そういうところも新一そっくりなんだから。…私には見せてくれないけど、気障^{キザ}っぽい科白とか言ったりするのかな？」

そのとき、ずきん、と左胸が痛んだ。

未だ『新一』というキーワードが抜けきれていない彼女を見つめ、

私は再び自分の罪を再認識させられる。まだ彼女の中で、『工藤新一』は確実に「生きて」いる。

いくら世間が彼のことを「過去の人」としようとも。

蘭さんにも恋人はいるようだ、と彼から聞いてはいるけれど、きっとこの罪はいつまでたっても拭うことはできない。

もちろん、拭うつもりはさらさらないけれど。

「…新一さんも、そう、だったんですか？」

「うん、よくもらったよー。年上、年下、同い年。学校外の彼のファンからも、ファンレターと一緒に家に届けられたりしてさー。あいつ、甘いもの苦手でしょ。だからひいひい言いながら、それでも必死に食べてたっけ」

心からおかしそうに笑う彼女の様子に、私は堪らなくなつて胸を押えた。

締め付けられる、この気持ち。

辛くて、痛い、心の傷は癒えることのないまま。

ちょうどセーラーのネクタイの上で私は両手をきゅっと組み合わせる。

俯くしかなくて、…下唇を噛むしかなくて。

逃げるわけには、行かなかつたけれど。

…でも。

「…朝っぱらから元気だねえ…。廊下まで丸聞こえだったよ、二人の声」

聞きなれた声に、私と蘭さんはほぼ同時にその方向を向いた。

案の定、彼が立っていた。

ふわあと大きな欠伸をして、頭をポリポリ掻いて。いつもの彼の姿そのままなはずなのに。いつもなら、だらしない、と二人で笑えるはずなのに。

さらに今日は一大イベントらしく、学生服を着込み、紙袋幾つも抱え、まるでどこか季節はずれのサンタ・クロースみたいで。あとから考えてみると、そのときの彼の姿は、「デパートのバーゲンセールで獲得した数々の戦利品を抱えるどこかのおばちゃん」という表現の方が当てはまったような気もするけど。それなのに。そんなフザけた考えもそのときは頭になくて。

「あ、ごめん。つい…ちよつとうるさかったかな」

「ん、別にいいけどさ。よく覚えてるねえ、そんなことまで」

悪気はなくとも『本来の自分』の昔話をされ、少々苦笑い気味の彼に対して、蘭さんはクスクス楽しそうに笑った。

「そりや毎年毎年そんなの見てたんだもん、覚えてるに決まってるじゃない。毎回妬いてたけどね」

ズキリ。

「それでも、どんなに胸焼けするまで貰っても、私がチヨコレートくれるって絶対思ってるみたいで。私がチヨコレートあげたらぶうぶう文句言いながら受け取って…ホワイトデーには」

「蘭ねえちゃん、喋りすぎ」

「あはは、ゴメンゴメン」

少し照れ笑いをする蘭さんの横顔と、彼の顔を見比べる。

7年も前に消えた彼のことをこんなに楽しそうに話す彼女。

それだけ鮮明に覚えていたのだろう。

彼の思い出が、蘭さんの中に今でも沢山あるのだろう。二人のたいせつな思い出。

更新できないけれど、忘れることもできない。そんな思い出を彼女はずっと抱えてる。

もしかしたらこの笑顔も実は二セモノなのかもしれない――

そんな不安が頭の中に渦巻いて。

なのに、工藤くんは相変わらず呆れた顔をして、複雑な顔をして蘭さんに表情を向けていた。私に向けるようなそんな顔。

なんでそんな顔をするの？前みたいに心配そうな、辛そうな顔をしていないの？

工藤新一になれないと蘭さんに告げたから？

――敢えて、そうしているの？

工藤くんなら、何か考えてのことだとは思っていた。

それでも、この表情は――

見てて辛すぎる。

いつまでも、彼には、

あなたには、蘭さんを想っていてほしかった。

それは、こんな運命にしてしまった私が思っではいけない感情なのはわかっているけど。

そんな感情が渦巻いて、私はしばらく二人を見ていることしかで

きず、ずっとその場に固まっていた。
けど。そんなとき彼がまた口を開く。

「大体いいの？もうすぐ結婚するんでしょ？彼、妬いちゃうよ」

「…え？」

「ちよっ！…こ、コナンくんっ！」

顔一面真っ赤にして声を張り上げ、あわてて彼の口を両手で押える彼女の姿を、私は呆けた顔をして凝視していた。一瞬、彼が私を見ていたような気がしたけれど、それを曖昧に感じることにしかそのときの自分にはできなかった。

「彼女、結婚するの？」

探偵事務所でスーツ姿の彼女にいつてきますを告げ、私たちは学校を向かう道を歩いていた。彼が紙袋4つ、私は1つ。

モテる男は辛いわね。彼に今日会ったら、まず最初にそう言うてやろうと思っていたのに、今日初めて彼に対して口にした言葉が気がつけばそれに摩り替わっていた。

「ああ。友達の紹介だったさ。しっかりしてる人だぜ、よく気がつくお人好しの人。園子に言わせれば、俺と似ても似つかない人だつて。どういう意味だ、ったく。…でもさ。あの人だったら蘭を絶対幸せにできるだろうなっと思う」

「…幸せ、なのかしら」

「幸せだよ、蘭は」

彼はふつと嬉しそうに微笑んだ。本当に、嬉しそうに。

「見ただろ、あの力才。…あいつがああいう顔するんだから、絶対心の底から惚れてんだよ。電話なんてすげーんだぜ？ほとんど毎日、1時間その相手と長電話するんだ。週に3回は会ってる、つづうのにさ。俺の話なんて最近出たことなんてなかったのに。朝っぱらからあんな話するなんてよっぽど機嫌いいんだな、今日はデートの約束とか…きつとそうだなあ」

カラカラと楽しそうに笑う彼の様子に、一瞬耳を疑って。心から、彼女を祝福している、という顔で。

「…あなたは…」

「俺はこの姿に充分満足してっからな…。こういうのはちょっとめんどくせーって思うこともあるけど」

紙袋を少し上に掲げてみせて、彼は少し溜め息をついた。

近頃の中学生は変なところでしつかりしてるよなあ、続けて彼はそう呟くと、眉間を寄せて苦笑いを浮かべた。けれども、それは本当に楽しそうで。

私を氣遣ってくれていることはわかってはいるけれど。

泣きそうだった私の心は一気に彼の言葉に救われた。

思わずふつと口許を綻ばせ、彼に相変わらずの憎まれ口を叩く。

「あなたはすごいわ。…けど。…相変わらず特定の女の子以外の、微妙な女の子の気持ちには疎いのね」

「あん？」

「それ」

私は彼の持つ紙袋を指差しする代りに、目を向ける。

今日は女の子の気合が入ってるのよ。バレンタインデーと同じ、あなたに向けた強い気合をね。

あなたにはその気持ち、わかってるのかしら？
ねえ、探偵さん？

「何が言いたいんだよ…？」

「さあね、それぐらい自分で考えなさい」

「ちよつ、おい…」

その言葉に慌てふためく彼を尻目に、私は彼より2、3歩先を歩くと、振り返ってこう言った。

「くれぐれも名前を書いた人の渡し忘れないようにね。健闘を祈るわ」

「…わかってるよ」

彼は不貞腐れたように口を尖がらせる。

どこか困惑気味のその様子が、少し可愛く見えた。

バレンタインデーにチョコを誰にもあげていない私には関係ないけれど。

関係ないはずだったのに。
なのに。

「どういうこと?...これ」

下駄箱を開けると、ラブレターやクッキー、キャンデーなどが詰め込まれていた。

あまりの展開に、私は閉口するしかなかった。

ありえないわ。

どうして、これが私の下駄箱にあるの？

隣りの人と間違えているんじゃないかしら？

「...知らねえのか?...おまえって結構モテるんだぜ？バレンタインに女の子が好きな人にチョコをあげるように、男もイベントに乗って、女の子に好きだっつつ自分の気持ちに気づいてもらいたいんじゃないのか？」

まさか。そんなことが、ありえない。ありえるはずがない。

大体、今日はバレンタインデーでのお返しをする日。男の子が自分の気持ちを伝える日という位置づけではないはずだ。彼の言うように、自分に好意を持っていて、『想いを伝える』ために敢えてこの日にプレゼントを渡す人も中にはいるかもしれない。でも、そんな人が、『3人』もいるだろうか？

それほど、自分は普段モテているという実感が沸いてなかったのに...。

気づいていない、ただそれだけなのだろうか。

目の前の状況に、未だ半信半疑な気持ちで、私はただ立ち尽くすことしかできなかった。

そんな中、上履きに既に履き替えたのか、意気揚揚と私の手から紙袋をとり、サンキュ、と呟くと、彼は5つの紙袋と通学かばんを持って下駄箱の陰に颯爽と消えていく。

私はそんな彼の後姿を見つめ、小さく溜め息をつくと、ようやく再び視線を下駄箱のモノに目を向けた。

3つあったプレゼントのうち、1つはイニシャルが入っていたことによりやく気づく。

「K・G？」

どこかで聞いたことがあるイニシャルだと思いながら全ての手紙を一つずつ開くと、それぞれに短いけれど熱のこもった数々のメッセージが書かれていて、私はそこで思わず目を丸くし、また、みるみるうちに自分の気持ちが続んでいくのを感じていた。

『もつと素直になった方がいいと思います。仏頂面より、笑顔の方が何倍も可愛いですよ。』

『大好きです。今までも、これからも、ずっと応援してます。』

『これからもよろしく。来年はチョコレートください。いつまでも待ってます。バレンタインデーじゃなくてもいいので、今からでも待ってます。生チョコっていうの、食べてみたいです。あ、でもチョコケーキの方がいいかも』

ずいぶん自己アピールが強くておせっかいな人たちね。

私はその手紙を見ながら、おかしくなってぷつと吹き出した。
一歩間違えればストーカーと取られてもおかしくない文面であり。

けどね、わかるんだから。

いくら名前を隠したって、口調を変えたって。あなたたちの字ぐらい、あなたたちの性格ぐらいお見通しなんだから。

一体何年あなたたちと付き合っていると思ってるの？

「…誓約書なんて書かされたら、どうしようかしらね」

私はそう呟いて苦笑すると、それらを一つずつ丁寧に鞆に入れ、下駄箱を離れた。

どこか浮き足だった気持ちを隠しながら。

（後書き）

中学生コ哀です。これもリメイクのリメイクのリメイクです（笑）。

実は作中に出ていた、とある女の子の名前、聞き覚えがある人も多いんじゃないでしょうか。

九十九さん。とある事件で関わっていた少女です。さて何巻で、どんな事件だったでしょう（笑）？

小学１年生でも、彼の、学校の時の彼と、それ以外のオフの時の彼の違いを知っちゃったら・・・。

サッカーとは別の、推理をするときのカッコイイ彼を知ってしまったら・・・。

惚れるに決まってます、と思いたい（笑）

そういう女の子は、やっぱり彼の周りに沢山いるんじゃないでしょうか（笑）。

哀ちゃんや、歩美ちゃん以外にも・・・つくづく、コナンは罪な男だ・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7514/>

頑張れ ホワイトデー！

2010年10月11日01時42分発行